
ずっと、冬のままで

工房径

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ずっと、冬のみまで

【Nコード】

N4827P

【作者名】

工房径

【あらすじ】

真紀と周平は会社の同期。入社当時から他の二人の同僚と共に深い絆で結ばれていた。

3年目の9月、真紀の引っ越しで通勤の路線が一緒になってから、ふたりの距離が動き出す。冬が終わるとき、ふたりはどんな場所にいるのだろうか。安全速度でゆっくり進む私鉄沿線恋物語第一弾。

はじまりは9月

気がつくと、逃げ出していた、彼から。

真紀は彼と相対する喫茶店の座り心地のいい椅子を蹴倒すようにして、駆け出していた。ビルの2Fのその店で、ただ冬の街並を眺めながらコーヒーを飲むのを楽しんでいたはずなのに。

真紀と周平は会社の同期で、この秋に彼女が引越してから電車の路線が一緒で。時折帰りが一緒になればカフェに行ったり、ごくたまに食事をしたりしていた。急に天気が崩れたとか、残業で疲れたとか。要するに待ち合わせではない、サラリーマンの「今日コレ行きますか」みたいな、偶発的カンパニー。

でも最近では、仕事帰りに周平のふわっとしたくせ毛の頭を見つけると、真紀は浮き立つ気持ちを抑えることができない。わざと気付かぬ振りをして、彼が微笑みながら近づいてくるのを待った。

彼はいつも冷静で、めったに感情を顕にしない。すぐ熱くなる真紀は、入社当初の目まぐるしい日々の中そんな彼によく助けられた。諭されても彼からなら悪い気はしない。彼にはそんな確かな信頼があった。

「やり過ぎた感はあるけど、黙っていられなかったんだろ。真紀らしいよ」

彼の言葉はいつも真紀を落ち着かせ、森の中に連れて行かれたように深い息を継ぐことができた。帰り道を共にするようになった最近、改めてしみじみと彼のありがたみを噛み締める。その低く穏やかな声が発せられる唇さえ美しい形に見えた。

始まりは9月の会社帰り、電車の中だった。周平は自分の読みかけの本に指をはさんだまま、その背表紙で真紀の肩を軽くとんとたたいた。真紀は音楽を聴いていたイヤフォンの片耳を慌てて外して、向き直る。

「また会ったね」

はじめは一緒だった部署も去年配置換えとなり、今ではなかなか会うことがない。今日は珍しく休憩室で会って話したばかりだった。

「周平君、この路線だった？」

「うん、笠倉町」

ここから25分くらい、真紀の駅のひとつ先だった。

「お隣だね、私は浅葱町」

「確か前は会社の近くに住んでたよな？」

以前の部屋は会社から徒歩3分で、同期の美砂がよく泊まりに来ていた。

「最近越したの。大家さんの都合で変な時期になっちゃって。夏休みほとんど引っ越しに使っちゃったよ」

エアコンの設置に時間がかかり、数日間冷房のない部屋で荷解きをしていたら脱水状態になりかかった、と言ったら、

「そっか俺は実家だから、そういう大変さはないなあ」

と笑った。残暑のけだるい空気を電車のエアコンがかき回してゆく。

「じゃああの1年目の時も、笠倉から通ってたわけ？そりゃ仮眠室の住人になるわ」

入社した頃は会社が事業を拡大したばかりで、殺人的忙しさだった。深夜までの作業は当たり前で、家族より一緒の時間が長かった。それだけに彼女の同期は結束が固いと評判だ。まさに同じ釜の飯を食った戦友で、いじっぱりでクールに見える彼の寝顔も、頼れる機転も、ぶっきらぼうの優しさも全て見てきた。彼も当時を思い出して苦笑した。

「よく真紀の弁当ごちそうになったもんな」

当時、朝一番に出社するのは真紀で、仕事部屋に入るとかなりの頻度で仮眠室からくしゃくしゃ頭の彼が出てきた。彼が淹れてくれたコーヒーを飲み、真紀のお弁当のお裾分けが彼の朝ご飯になった。「だってあんまりにもかわいそうで。あの頃コンビ二も近くになかったし。よく乗り切ったよね」

「真紀の五目おにぎり、うまかったなあ。あのこんにゃく入ってるやつ」

3年目にしてこぼれた台詞に驚いた。当時は何がおいしかったなんて言っではくれなかったし、第一覚えていてくれるとは思わなかった。

「あの時言ってくれたらよかったのに」

照れ隠しにそう言ったら、

「言えば張り切って作るだろ。真紀だって同じだけ忙しかったんだから」

静かに微笑む。そうだった、彼はそう言う人間だった。

「そうだよな。最近やっと仕事に余裕できたから、私もこっちに引っ越せたんだもん」

彼女の駅までは会社の最寄り駅から20分。会社の近くより家賃は少し高めだが、買い物も便利で部屋の近くは緑も多かった。

「そっか浅葱町か。駅前にバーナードカフェあるもんな」

彼は突然沿線のコーヒーチェーン店の名を言う。真紀が首をかしげると、彼女のバックからはみ出した赤い保温マグを指した。セントバーナード犬の樽の部分に「バーナードカフェ」と店のロゴのついたマグだ。これを使うと会社でも暖かいうち飲めて、100円引きになるので、よく利用していた。

「昼休憩室で会った時、秋冬限定スパイシーバニララテの濃厚な匂いが」

周平はそういつていたずらっぽく笑う。

「ええっ？匂いだけでわかるの？」

確かにかなり特徴的な香りではあるけれど。彼は得意げに微笑んでいる。

「俺、あれ毎年すっごく楽しみにしててさ、帰りに浅葱で途中下車するくらい好き。」

意外だった。あんな甘い飲み物が好きだと、素直に告白する彼が。今日も午後からずっと飲みたくて。真紀のせいだ」

何だか言い方まで甘くて、ときどきした。ここにいるのは、あの周平なのに。赤くなる頬を隠すのに、俯いて音楽プレイヤーを止める振りをした。

その日真紀は「奢るよ」という周平に連れられて、本日2回目になる浅葱町のカフェに寄った。彼は独特なスパイスの香りを吸い込んで満足気に微笑む。赤いガラスのランプシェイドが彼の笑い皺を深く見せ、3年という時間が彼を柔らかく解したような気がした。

いい男になったな、くやしいけど。

二人の時間の始まりだった。

12月 ふたりの距離

それから。駅や電車でふたりが会った時はかなりの確率でバーナードカフェに寄った。

「もう条件反射だよ」

周平は苦笑した。

「真紀の後ろに、スパイシーバナリラテの幻が見える」

仕事が違うのでそうそう一緒にはならなかったが、会う時は大概遅い時間で、ふたりともぼろ布のようになってくたびれている。空腹だったがそれよりもカフェで過ごすゆったりした時間が心地良くて、途中下車までする周平につきあう真紀だった。蜜のような甘さとオリエンタルな香りを楽しみながら、ぽつりぽつり言葉を繋いでゆくと、不思議と元気になれた。

そのうちたまにだが夕食を共にするようになり、アルコールが入った時だけ、自分を崩さない彼が少しだけ本音を吐くようになった。仕事の愚痴、自己嫌悪になった出来事。彼は自分が、正義感が強く融通が利かないので、怒ると歯止めが利かない、特に女性には引かれてしまうのであまりネガティブなことを言わないようにしているのだと、照れくさそうに言った。

「最近周平君と仲良いらしいじゃん」

同期の美砂がサンドイッチを頬張りながら何気なく言う。それが聞きたかったか。真紀はわざととぼけた。

「前から仲はいいでしょ、美砂も良介君も、鉄の絆の同期4人ですから」

良介はもう一人の同期で最近美砂の彼氏になった。前々から美砂

に熱を上げていた彼の恋が実った時は、真紀も自分のことのように喜んだものだ。

「そういう意味じゃなくってさ、わかってるんでしょ」

美砂は肘で真紀をつついた。

「おかしいと思ったよ。寒がりの美砂が公園でランチしよ、なんて」

師走に入り御用納めまでは目の回る忙しさだ。でもランチくらいは、という美砂の提案で、デパ地下の高級デリを買って公園で食べることにした。本日のメニューはクリスマスが近いのでターキーのサンドイッチ。ほんのりジンジャーブレッド風味の丸いパンに、はみ出すほど挟まったターキー。パプリカの赤とピーマンの緑がさらに季節感を醸し出している。実際のクリスマスはおそらく残業だろうけど。

「うちの後輩がさ、ちよつとした周平ファンで」

入社当時同じ課だった美砂は、現在広報室の担当だ。仕事柄が活発な雰囲気で彼女の後輩も皆明るく美人揃いだった。周平のいる企画部と同じ階で少なからず交流がある部署だ。彼は見た目も悪くはないし、クールだが誰にでも丁寧に対応する誠実な人柄は女性に受けるのかもしれない。

「その子あんと駅が一緒なのよ。周平君と歩いてるのを何度も見たらしくてさ、つきあってるんですかって」

見られていたなんて。かつと頭に血が上った。

「そんなんじゃない！」

語気が強くなったのに気付いて、真紀はサンドイッチの包装を畳む振りで下を向く。恥ずかしい、秘密基地を暴かれて怒る子供みたい。

「こないだも電話した時カフェで一緒だったじゃない」

「あれが初めてだって」

初めてバーナードカフェにふたりで入った時に、たまたま真紀の携帯に掛けてきて、周平と一緒にだ、と言ったら代われ代われとうる

さかった。

「確か周平君で真紀と降りる駅違うじゃん。わざわざ浅葱で降りるわけでしょ？」

美砂の追求はもつともだった。

「偶然電車が一緒になった時だけだよ。うちの駅にあるカフェの秋冬メニューが気に入りで。最近周平君の企画が通ったじゃない。任されるのも結構大変らしくて、ゆっくり甘いものでも飲んで休んでから帰りたいらしいよ。言うなれば茶飲み友達？」

自分でも饒舌すぎるかな、と真紀は思う。

「ああ、周平君あんまりお酒飲めなかったもんね」

入社当初、飲めない酒をしこたま飲まされては何度もつぶされていた。

「それが最近は食事するとグラスだけどワインとか頼むんだよ。この3年で相当鍛えられたんだね、つと」

そこまで言つて、真紀は美砂が興味津々で自分を見つめていることに気がついた。美砂はにやっとして、

「つまり、二人はカフェ友であり一緒に食事してお酒も飲むと。」

「おかしい言い方するのやめてくれないかな」

真紀は、バーナードカフェに比べると薄くてコクもないコーヒーの残りを飲み干すと、ゴミ箱に紙コップを投げた。

「何、怒ってんの」

「ふたりに食事したっていいじゃない。美砂だって帰りが一緒ならそうするよ」

「そりやそうかもしれないけど。ただ・・・」

美砂は口ごもった。

「実はこないだ、私もあんたたち見たのよ、赤松駅で。」

赤松は会社の最寄り駅だ。

「そう、声かけてくれれば良かったのに」

「だって、二人ともすっごくうれしそうにしてて、」

美砂は自分が恥ずかしそうにした。

「なんか入り込めない感じだったんだよ。これはひよっとするのがなってる」

「そんなの、」

真紀は立ち上がった。

「条件反射だって！本人も言ってたもん！私を見るとラテを思い出すって！」

びっくりした鳩が2、3羽空に飛び立って行った。

「ごめん、真紀、悪かった」

美砂も立ち上がって彼女の肩をつかんだ。

「・・・うん」

真紀はもう一度美砂と座ると、大きなため息をついた。

「私こそ。パニック体質だから、騒いじゃってごめん」

「パニックっていうか、直情型？真紀『ティファール』とか呼ばれてたもんね。『あつという間にすぐに沸く』」

不名誉なあだ名に顔をしかめる真紀に美砂は容赦がなかった。

「当時は上司にだって楯突いてさあ。そう言えばよく周平君が静かにその場を収めてくれたよね。真紀も最近では随分と大人になったと思ってただけだなあ。」

同期には適わない。真紀は苦笑した。

「はあ。本質は変わらないよ」

「そういう意味でも貴重な存在だもんね、周平君は」

「え？」

「変な意味じゃなく、真紀の手綱を引いて諫めてくれるっていうかさ」

一見派手目に見えるのに時代小説を好む美砂は、時々こんな言い回しをする。私は暴れ馬か。真紀はため息をついた。

「周平君てさ、ああ見えてもほんとに怒りっぽくて、いつも何とか我慢して押さえてるんだって。だから私の沸騰の勘所がわかるんじゃない？それだけだよ」

あはは、と美砂の笑い声が乾いた空気に冴え渡る。良く気が回り

明るく前向きな彼女に、真紀はいつも救われていた。自分もこうありたいと思うのだけれど、すぐ負のループに入って、もがいて抜け出せなくなってしまう。大騒ぎをして迷惑をかけて、よく愛想をつかされないと思う。失うのが怖い、友情も、居心地の良い時間も。コーヒーの香り越しの穏やかな彼の声、ふたりの時にみせる柔らかな笑顔。

バーナードカフェも2月には春の新しい商品の看板が鮮やかに掲げられるだろう。彼の好きな冬の甘く香ばしいラテなど、元々なかつたかのように。そのうち街ごと暖かい陽気に浮き立ち、むせ返るような春に塗り替えられてしまうのだ。

春が、来たら。ふわふわと淡雪のように降り積もる曖昧な関係も、知らぬ間に溶けてなくなっていくのだろうか。

1月の寄り道先

「今日はさ、うちの駅に降りてみない？」

珍しく周平が新しい提案をした。

1月の土曜日。周平が企画した会社のイベントが開かれた。例年今の時期に開かれるのだが、周平の提案で、今年は取引先の他に近隣の一般の入場者も呼び込んで会社を知ってもらおうという趣旨になり、人数をさばくためほとんどの社員が休日出勤した。イベントは滞りなく終わり、遅い昼食を兼ねた打ち上げの後、真紀が赤松駅に向かうと周平がいた。

「おつかれさま。大成功だったじゃない」

「お陰さまで。真紀もご苦労さん。風船配り、子供にひっぱりだこだったな。」

見られていたとは知らなかった。恥ずかしい。

「うまく渡せなくて風船が飛んでっちゃって。大泣きされちゃった」

「見てた、見てた。真紀の方も泣きそうになってたろ」

初めての大仕事を終えた周平は少し興奮して饒舌だった。電車に乗り込んでからも、しばらくイベントの話を夢中で話している。しかし浅葱駅に近づく頃には、落ち着いたのか寡黙になった。

「3時頃に電車に乗るのって、なんかさぼったみたい。変な感じ」

真紀が話しかけると、周平は難しい顔をして窓の外を睨んでいた。

「・・・疲れた？昨日も準備で遅かったから」

真紀の声にぱっと気付いたように顔を向けた。

「いや、そうでもないけど。ごめん、ぼうつとしてた」

彼は何か躊躇っているようだったが、しばらくして、

「今日はさ、うちの駅で降りてみない？」

と言った。周平の最寄駅である笠倉町は、繁華街ではあるが真紀の浅葱駅よりは小さく昭和の面影が残る古い街だ。

「笠倉で？」

「うん、高校時代から行きつけの喫茶店があるんだけど、そこに連れて行きたいな、と思って」

彼は迷うように顎の先をさすっていた。

「古い店なんだけど。アイリッシュコーヒーを出す店なんだ。昼は喫茶で夜はバーになる。今日結構寒いし、暖まるよ。ウイスキー大丈夫なら」

「アイリッシュって、角砂糖にお酒かけて火を点すやつ？」

「いや、そののはまた違うんだけど。なかなか喫茶やってる時間に誘えないし。コーヒー友達の真紀には一度味わってもらいたいと思ってたんだけど」

「・・・じゃ、是非」

コーヒーにも惹かれたけれど、またひとつ、知らない彼を見られることにわくわくする。真紀は自分の駅を一つ乗り越し笠倉町で降りた。

1月 蒼い焰

「少し歩くけど」

彼は駅を出ると駅前の路地に入った。古い店と言ったが、そこは5階建てのファッションビルの2階にあった。女性向けの雑貨や洋服のテナントが入った今風の建物だ。

「元はもつと地味な地元の店が入ってたんだけどね、何年か前に改装して女の子向け店舗ばかりになって。おかげで入りにくくなった」

2階の奥まった一角に時の止まったような喫茶店があった。ショーケースにコーヒー豆の詰まったコーヒーカップとサンドイッチやパフェの蠟細工の見本が並んでいる。

「夜のバーの時間はビルが閉まるんで、こっちの入り口は閉めて外階段から出入りするんだ」

きよろきよろする真紀に周平は微笑んだ。中に入るとテーブル席に一組若い女性客がいる他、客はほとんど中高年とおぼしき人ばかりで、皆カウンターに陣取っていた。

「常連さんが多いんだよね。マスターの知り合いとか。このビルのオーナーも同級生らしい。マスターの娘さんは俺の高校の同級生」
「ふうん」

二人は窓際の席に座った。交差点が見下ろせるその席からは横断歩道を行き交う人の流れが見えた。

「周平君かあ、久しぶりだねえ」

鼻の下に白髪まじりのヒゲを蓄えたマスターは、にっこりして二人の前に水のコップを置いた。

「ご無沙汰です。順は元気？」

「お陰さまで。お連れさんとは珍しいね」
「ぺこりと真紀は頭を下げた。」

「会社の同期の、藤沢真紀さん。アイリッシュコーヒーを飲ませた

くて」

名前まで紹介されるとは思わなかった。緊張する真紀にマスターはいたずらっぽく微笑んだ。

「うれしいね、でも恋人じゃないんだ？」

真紀は思わず、違います、と口を開きかけたが、頬杖をついた周平が口の端を上げて静かに微笑んだ。

「・・・ええ、不本意ながら、まだ。」

不本意？・・・まだ？

真紀は聞き間違えかと思った。彼はそんな軽口を叩ける人間ではなかったはずだ。慌てて問うように周平を見ると、一瞬目が合った。彼から先ほどの笑顔は消え、ぐっと深くを探り当てるような視線がそこにある。マスターも驚いたのか少しの間彼の顔を見ていたが、そこは店主、お盆を持ってあっさりカウンターに引き返していった。「さてと。このアイリッシュはね、マスターが目の前で入れてくれるんだ。結構質の良いウイスキー使ってるから、お酒の弱い俺でも悪酔いしない」

話し始めた彼はいつもの周平だ、と思う。イベントの後ではしゃいでいたのかな。それとも昔なじみの店に来たから？さっきのはちよつとした冗談だろう。

真紀はほつとしながらコーヒーに興味を戻した。

「酔う程ウイスキーを入れるの？高校の時から来てたって言ってたけど？」

「アイリッシュを最初に飲んだのはちゃんと20歳になってから。

俺酒弱いの知ってるでしょ。マスターも同級生の親父だし。成人したら飲ませてやるってずっと言われてて、初めて淹れてもらったときは感激した。アルコールもこれを飲むために鍛えたようなもんで」

そのうちマスターがブラウンシュガーの入った砂糖壺やアイリッシュウイスキー、コーヒーポットなどをカートで運んできた。手慣れた様子で二人分のホット用の小さいグラスにブラウンシュガーを入れウイスキーを3分の1くらい注ぐ。そこにアルコールランプを

翳し火を付けた。青い炎がめらめらと立つ。マスターはグラスを持つとくるとグラスの底を回すように揺らした。グラスがテーブルに擦れる音とともに？の青が踊ってウイスキーの芳香が上がる。ふと顔を上げると、炎越しに彼と目があった。ブラウンシュガーが溶けて・・・溶かされる。熱い。燻る香りに酔いそうだ。そう思った瞬間、マスターが手を止めてコーヒーを注いだ。瞬間、炎の青が消えコーヒーの香りがウイスキーと混じって螺旋階段のように絡んで立ち上ってゆく。最後にとろりと濃厚なクリームが乗せられ、二人の前にグラスが置かれた。マスターは一礼するとすぐに去って行った。

「どうぞ」

自分もグラスを持ち上げて、周平が微笑む。真紀もあわててグラスを取った。ぷん、とアイリッシュウイスキーの香りが鼻腔に飛び込む。冷たいクリームが唇に付いた後、濃厚な甘さと香ばしい苦みがウイスキーに溶けて舌を刺激する。こくんと一口を飲み下すと、絡み付くようにのどを落ちてゆく。真紀は小さくうなってグラスを置いた。

「どう？」

周平がゆったり微笑んだ。

「香りだけで酔いそう。熱くて、冷たくて、濃くて、甘くて、どれも too much なんだけど・・・美味しい」

真紀がうつとりと答えると、周平は一瞬目を開きまたすぐ目を細めた。

「・・・良かった」

1月 燻る気配

窓の雨粒を追いながらアイリツシュコーヒーを楽しむ。濃厚で甘く癖のある、彼好みのコーヒークテル。マスターは珍しいと言っ
てはいたけど、ここには他の誰かを連れてきてはいないのだろうか。
あの青い焰を誰かと見たのだろうか。

―本意ながら、まだ―

同じ言葉が耳の中で木霊する。私酔ってる？周平を見ると、彼も
ほわんと頬を明るませていた。

「大分あつたまつたな。真紀は？」

「うん、指がじんじんして熱いくらい」

ウイスキーのせいで冷たかった指先が温かくほぐれていた。周平
はどれ、とコーヒークテルのグラスを持たない左手で彼女の手をするり、
と掴んだ。真紀は驚いて一瞬引こうと思ったけれど、気まづくなり
たくなって、そのまま黙って手を預ける。

「酔った？」

焦った真紀ができるだけ落ち着いた声を出すと、

「うん、そうかもな、あれっぽっちで」

と他人事のように笑う。

「酔ったときは、つい油断してボロが出る、だから」

彼は彼女の淡いマニキュアを施した爪を指先で撫でた。

「なるべく飲まないようにしてるつもりだったけど。もう何度目にな
るかな、真紀と飲むの」

周平は残りのコーヒークテルを飲み干して、グラスを置く。最後にすつ
と彼女の指先に手を滑らせて、離れた。まるでマツチだ。真紀の中
でしゅつと音がして灯がともる。真っ赤になった真紀は触れられて
いた手を自分の胸に戻した。どうしよう。顔を上げてはつとする。

周平の視線は迷うことなくまっすぐに注がれていた、彼女に、彼女だけに。いつもほっとする安らかな空気をまとった彼女なのに、いまは煮詰めた蜜のような、ねっとりとした熱い気配を絡ませている。「・・・ほんとは素面の時に言うべきなんだろうな」

周平は目を反らさずに語り始める。

「でも、これでももう随分時間をかけたつもりなんだ」

まさか、そんな。まだ自分の気持ちも臆げだっているのに。その一方で自分の予想している彼の言葉が、ただの自惚れになることがたまらなく怖くなった。

「俺は・・・」

1月 逃げる

頭が沸騰して激しく泡立つ。その勢いそのまま真紀は椅子から立ち上がり、コートとバッグを手に取ると踵を返して、逃げた。

視線の端に驚いて腰を上げた周平が見えたが、構わず走った。パンプスのヒールは心音と同期して激しく鳴り響く。ファッションビルの中は服や雑貨の店がぎっしり詰まっていて、間を縫うようにかき分けて進み、階段を駆け上がった。

三階に降り立ち、近くに化粧室が目に入ってそのまま飛び込む。鏡の前に立ち肩で息をした。襟の崩れたチャコールグレイのスーツ、紅潮した頬、ぼさぼさの髪。髪を撫で付け、水で濡らした手のひらで火照った頬を包んだ。何してるの！なんで逃げちゃったの！後先を考えない自分の性格が、つくづく嫌になる。今日たといここを逃げ切ったところで、今度会ったらどんな顔をすればいいのだ。頭を抱えながらメイクも直して15分。そうそう籠もってもいられない。真紀はついにそこを出ることにした。

おずおず扉から顔を出したが、彼の姿はなくほっと息をつく。すぐ近くのブティックにディスプレイされている服を眺める振りで足を踏み入れた。何の気なしにハンガーにかかったワンピースを手にとってみる。深い紫色の襟の空いたニットワンピースは、シンプルだが身体の線に沿ったデザインで、いつもの自分なら選ぶような品物ではなかった。自分の気持ちを落ち着かせるようにその柔らかな生地を撫でていると、

「それ、いいですよねえ」

巻き髪の若い店員が音もなく背後にずっと寄ってきたので、真紀は驚いて肩を揺らした。

「びっくりさせちゃいましたあ？」

店員は無邪気に笑った。ミルクティ色の髪にスレンダーな体は何をきても似合いそうだ。肩先までのまっすぐな黒髪をいじりながら真紀はこの店に入ったことを後悔した。店員は構わず真紀の後ろからワンピースをあててみる。

「このワンピース着てみるとすごく女らしいラインがでますよお。シツクなんでお呼ばれの時だつてオツケーです。首元がスクエアカットなんで、開いてても上品ですっきりきまるでしょう？チョーカーとか大振りのネックレスをしてもいいし、ティペットとかしてもおしやれですよ。可愛くないですかあ？」

さすがプロ、そんな言葉と一緒にいつのまにか試着室に送りこまれてしまった。こんなはずじゃなかった。真紀は情けなくなりながらもたもたと着替えた。

「どうですかあ？」

店員の明るい声に真紀はしぶしぶカーテンを開いた。

「ああ、やつぱり！肌が白いからパープルが映えますよお。」

店員はにこにこと肩を押すが気後れする事この上ない。余り着ない色、深めに空いた襟ぐりから際立つ白いデコルテ、シェイプされたAラインに包まれた腰はかなり強調されて見える。真紀の所在なさげな気持ちが顔に出たのだろう。店員はにっこりして

「こういう服普段着ないですかあ？でもすっごくお似合いですよお！この位イメチェンした方が彼氏さんも喜びますって」

彼氏。周平の顔が浮かんで思わずどきとした。そうだ、彼から逃げてたのに。こんなことしないで早く帰らなくちゃ。しかし気がつけば彼女はワンピースを買うはめになっていた。流されやすい自分が嫌になる。もう一度スーツを着る時間が惜しく、このまま買った服を着ていくことにした。

「彼氏さんの感想も聞かせて下さいね」

否定しとくんだった。満面の笑顔で送り出され、着ていたスーツの入ったショップ袋を持って真紀はそそくさと逃げ出した。

1月 逃げられない

小走りで階段に向かっていていると、真紀の携帯が鳴った。

「！」

周平のメロディだ。階段のホールに思いの外高らかに響き渡る。何の気なしに設定したけれど、今思えば恋愛映画の相手を恋う甘い挿入歌だ。

ああ、どうしよう。切ない旋律の中で、いろいろな場面が蘇る。入社当初、理不尽な事に怒る真紀を諭して一緒に上司に謝ってくれた彼。寝ぼけ眼で彼女のおにぎりを美味しそうに頬張る姿。カフェで見る柔らかな笑顔、そしてさっきの、挑むような熱い眼差し。真紀ははつきりと自覚してしまった。

思っていたよりずっと前から、ずっと深く、私は、彼を。

その時携帯の曲が切れ、代わってかつかつと早足で階段を上がってくる靴音が響いた。足音は徐々に大きくなる。

覗いたふわっとした髪、紫とターコイズブルーの縞のマフラーに、だくん、と胸が鳴った。

彼だ！

真紀はとっさに後ろを向いて息を潜めた。服が違うのだから、バタバタ慌てるよりばれないはずだ。周平は立ち止まって辺りを見回している。

早く、早く行って！焦れた真紀の背後でやっと彼が動き始めたその時、また彼女の携帯がなった。思わずびくっと肩が震えてしまう。「んっ」

周平の反応は早かった。携帯が乱暴にぱちんと閉じられる音がして、真紀の肩をぐつと掴んで振り向かせる。乱れた前髪越しの燃えるような瞳が真紀を捕えた。

「…お前なあ」

そんな呼び方をされたのは初めてだ。彼は真紀の肩から手首まで手を滑らせ、ぎゅつと掴みなおす。そして少し身体を離すようにして彼女の全身を見た。時間にすれば10秒にもならない。しかしそのゆっくりと撫でるように動いてゆく視線に、真紀は身体から火が出そうだった。

「なに着替えてんの」

大きく息をつき周平は言った。怒っているのか呆れているのか、おそらく両方に違いない。

「ごめん、なさい」

素直に出た謝罪なのに、その言葉で何故か周平の眉がぴくりと上がる。

「何に、ごめん？」

真紀は問い詰められた子どものように肩を縮めた。

「えっと、・・・逃げたこと」

彼は、はあっ、とため息をつく。

「・・・変装してでも逃げたかった？」

周平は下から覗き込むように真紀を見上げた。

「・・・そんな。ただ、店員さんに誘導されて、気がついたら試着して買っちゃってて。変装なんて・・・」

言っていて自分でも支離滅裂だと思う。

「・・・俺を無視しようとしたね」

周平の顔が近づいた。

「だって」

真紀はまた沸騰する自分を抑えるのに必死だった。

「混乱するよ、こんな・・・」

大きく息を逃がして肩を揺らした。周平は触れる程近くに顔を寄せて言った。

「こんな、何？」

何って。はつきり言われてないのに、言える訳がない。真紀は目を伏せて闇雲に首を振った。泣きそうだ。逃げたい、でももう逃げられない。どうしたら。いつもパニックに陥ったとき助けてくれるのは、他ならぬ周平だったのに！

言葉も見つからないまま、しばらくしておずおず目を開けると、周平も怯える少年のような目をしていた。

1月 紡ぐ言葉

「・・・ごめん、でも決めてたんだ」

ぽつりと呟く姿は、さっきの強引な彼とは別人のようだった。

「イベントが終わったら動く、って。2月前には何とかしなきゃ、
と思ってたから」

周平も、不安に思ってくれていたのか。冬と共に終わりになるか
もしれない、この関係を。

「・・・何とか、って？」

小さな声だったが、真紀は勇気を出して問いかけた。だって聞か
なきゃ、ずっとこのままだ。真紀の言葉に周平は大きく息を吸った。
「はじめは、危なっかしい真紀を俺が面倒見てるつもりだった」

周平は真紀の手首を握ったまま、もう一方の手で彼女の頬を包ん
で上を向かせた。切なげな視線に胸が締め付けられる。

「・・・でも、おにぎりもらった頃から、実はもう捕まってた。」

「え？」

「一生懸命だけど融通がきかなくて。いつも目一杯のくせに、人の
こと心配して、その気がないのに俺を餌付けする」

すねたような言い草だ。

「去年仕事場が離れたときもどうってことないし。必死で同期会開
いても何も変わらない。散々美砂たちに責められたよ。真紀が引つ
越して初めて浅葱で見かけたときも声がかけられなかった」

「初めてって、あの時じゃなかったの？」

ふたりが電車で出会って、初めてバーナードカフェに行った日。

「・・・あの日休憩室で、バーナードのマグ使ってる真紀を見て、
策を練った」

彼の顔は真っ赤だった。

「香りで分かるくらいラテが好きなのは嘘じゃない。だけど、」
こつんと額を合わせた。

「これが最後のチャンスかもしれないってしがみついた」

周平は額を離して真紀の両肩に手を置いた。ぐい、と後ろに押してふたりの身体を少し離し、真紀の目をじっと見る。見透かすように強く、熱の籠もった視線。耐えられなくて身をよじると、逆にぐっと引き寄せられた。周平の胸に倒れ込んだ瞬間、そのまま両腕で固く抱きしめられる。彼の体温、彼の匂い。彼の全てが次々と真紀の五感に飛び込んでくる。鼓動と吐息がマグマのようにたぎって、もうどちらのもののかもわからなくなった。

「・・・俺のものになつて。」

絞り出されるような声に震えた。

「お願いだ」

気が遠くなりそうだった。3年も彼が自分を思っていた事実と、目の前に突きつけられた熱情に。

「真紀」

自分の名前がこんなに自分を熱くするなんて。

真紀は身震いしながら彼の胸の中でくくりとうなづいていた。

「・・・駄目だ」

唸るような周平の声に顔を上げた。

「言つて、ちゃんと」

「！」

なんて人。私をとことんまで追いつめる。真紀は涙目で周平を仰ぎ見ながら震える唇を開いた、その時。

1月 意外な伏兵

カン、カン。フロアから高いヒールの足音が響き、こちらに近づいてくる。周平の胸の中から真紀が慌てて身体を離れたその時、足音の主が階段に姿を現した。ミルクティー色の巻き毛にピンヒールのニーハイブーツ。貴重品をいれた小さなビニールトートをぶら下げたあの店の店員だった。

「えっ」

思わず真紀は固まってしまふ。彼女のワンピースをちらりと見て、店員は、ああっ、と高い声を上げた。

「さつきはありがとうございますう！彼氏さんと待ち合わせですかあ？」

店員は周平を見上げて満面の笑みを浮かべた。

「ねっ、このワンピース素敵ですよねっ？」

「いやいや、着替えて怒られましたけど？ていうか彼氏ということでもいいの？真紀は困ったように周平を見上げたが、

「うん、よく似合ってる」

周平からすつと澀みなく出た賛辞に、真紀は目を見開いた。しかも周平は臆することなく店員に微笑むと、真紀の両肩に手を置いて見せつけるように、

「綺麗にしてくれて、ありがとうございます」

とまで宣った。このヒト、こんなキャラだっけ？真紀はめまいがしそうだった。

「うわあ、ゴチソウサマですー。」

店員は頬を赤く染めながらも満足そうに何度もうなづいた。

「こういふことがあると、この仕事やっててよかったあつて思っんですよー」

また来て下さいねえ！店員はぶんぶん手を振って去って行った。両肩に置かれた彼の手が熱い。解こうとして肩を捻ると、今度は手

が固く繋がれた。

「・・・離して？」

もう恥じらいで焼き切れそうだ。

「どの口でそんなこと言う？」

いわゆる恋人繋ぎで握り直されて、周平は意地悪く笑った。

「もう逃がすつもりはないから・・・二度と」

1月 ふたりの冬を閉じ込めて

二人は手を繋いだまま、笠倉駅にたどり着いた。明日の日曜会う約束をして駅の改札で別れるつもりだったが、何も言わず一緒に改札を潜ってくる。

「電車が来るまで」

彼はそう言うと一緒にホームに立った。真紀は、彼が当たり前のよな顔をして畳み掛ける執着心に慣れる気がしない。こんなにぎつちり指を絡めて手を握られて。コートを着ることも出来ない。思わずくしゃみが出た。

「ああ、ごめん」

さすがの周平も手を離す。柱の陰で真紀はショップの袋とバッグを下ろしてコートを羽織った。しかしボタンをかけようとした彼女の手を、周平は片手で制する。

「なに？」

周平は鞆の中からごそごと小さな包みを出した。銀色のリボンがついた手のひらサイズの青い袋。まさか。

「今日誕生日だろ」

「・・・知ってたの」

イベントの準備で毎日徹夜に近い状態だったと聞いている。クリスマスも年末もなく、正月休みも1日位だったとぼやいていた。それなのに。

「知ってるさ」

周平はさらっと言うと、開けて？と真紀を促す。真紀の手のひらに乗せられた袋は、見かけより重かった。青い紙袋の中には黒いベルベットの袋が入っている。傾けると、中身がずるりと彼女の手に滑り落ちた。黒い革紐にきらきらした雪の結晶のペンダントヘッドのついたチョーカーだった。

「・・・綺麗」

「安物で悪いけど」

彼はそれを奪い取るとさっさと留め金を外して彼女の首にくるりと回した。暖かな彼の指がうなじに触れる。彼は真紀の肩をくるっと回して自分に向き直らせた。

「今の服にぴったりだ」

周平は満足そうに微笑んだ。

「ありがとう・・・嬉しい。」

向かい側に止まる電車の窓ガラスに自分を映して見る。自分にしては大きく空いた胸元に、きらきらと雪の結晶が輝く。二人の過ごした冬の証の様に。真紀は胸が一杯になった。

そんな彼女を周平はしばらく見つめていたが、突然自分の紫とタコイズのマフラーを外すと、真紀の頭にばさつと被せる。はっとして見上げた真紀の頭をそのマフラーごと引き寄せて、口付けた。仄かなアイリッシュウイスキーの深い森のような香り。唇を舌でノックして素早く中へ入ってくると、マドラーのように吐息がかき回されて身体がぶるりと震えた。

「！」

唇が離れた瞬間、ざーっと風が舞い起こりホームに電車が入ってきた。ボタンを留めないコートが翻る。

公衆の面前でなんてことを！真紀が口を押さえて真っ赤になっていると、

「ほら、乗れよ」

なんて、につこり微笑む。人畜無害みたいな顔して。真紀はよろよろと電車に乗り込みドア近くの手すりにしがみついた。

「信じられない！」

真紀の叫びは発車のベルに紛れて他の乗客には聞こえなかったかも知れない。しかし、ホームの彼には届いたようだった。

「後悔した？」

周平はにやりと笑った。

「・・・でももう逃がさない、絶対に」

黒い魔法使いの呪文のように、その言葉とともにドアが閉まった。動き始めた電車は真紀の気持ちを置き去りに走り出す。待つて！待つてよ！マフラーに残った彼の香りも唇の感触も、一瞬たりとも周平を忘れさせてくれない。

逃げるなよ、俺から。未だ柔らかく抱きしめられているような錯覚に、真紀は甘いため息をつき静かに目を閉じた。

F i n

1月 ふたりの冬を閉じ込めて（後書き）

読んで下さってありがとうございました。

この後後日談を挟み、周平サイド、スピノフなどを予定しています。

もう少しおつきあいいただけたらうれしいです。

読んで下さった後、あなたが少しでも幸せになれますように。

後日談〜1月 ラテの冷めない距離（1）（前書き）

10話の翌日のお話です。つつい超極甘になってしまったので、
お好みでない方はスルーしてください。

後日談／1月 ラテの冷めない距離（1）

日曜の待ち合わせはやっぱバーナードカフェだった。あれから
だめ押しのメールがきて。

「明日10時、バーナードカフェ。待ってるから」

昨日話して決めてあったのに。何度もその文面を見て、持ち帰っ
てしまった彼のマフラーに顔を埋めて。なかなか寝付かれないまま、
朝を迎えた。

待ち合わせの後はどこへ行くのか。映画とかだったらきつと寝て
しまう。真紀は鏡の中の自分の頬を叩いた。シルバーグレイのUネ
ックのニットを選んだのは、もらったチョーカーネックスが合い
そうだと思ったから。黒とグレイと赤のチェックのフリンジがつい
たスカート、黒のラメが入ったモヘアのジャケットを合わせた。最
後にネックスの金具を止める。雪の結晶のきらめきを見つめなが
ら、昨日付けてくれた時のうなじに触れた指の感触を思い出して赤
面した。私、こんな調子で今日1日もつんだらうか？もたもたして
ブーツも上手く履けなかった。

出掛けたのは待ち合わせより30分以上前で、5分程で着いてし
まう。落ち着いて周平を待とうと思っていたのに、その彼がテーブ
ル席から手を降ってくる。アイボリーのタートルネックのセーター
にダークブラウンのジャケット。手には真紀と色違いの緑のマイマ
グ。

「・・・早いね」

真紀が驚きを漏らすと、ふわふわの前髪の下で嬉しそうに目が細
められた。

「待ってるってメールしたろ？」

得意そうに言う。

「真紀は早いだろうと思ってたからね」

真紀が席に近づいたタイミングで、耳元に口を近付け囁いた。

「少しでも早く会いたかった。それ、似合うよ」

ばくん！あり得ない強さで胸が鳴る。胸を押さえて、彼の前に座った。心臓がもたない！彼のマフラーを入れた紙バッグを取り出す振りで下を向き、息を整えた。

「これ、ありがとう」

「・・・どういたしまして」

意味深に微笑む。マフラーを取り出して首に巻くと、すっぱり顔半分まで埋まってから、

「真紀の匂いがする」

と言った。

「もう、やめてよ」

真紀は涙目になって懇願する。

「何が？」

「こっこの、慣れないよ。周平君、人が変わったみたいなんかもん」

誰に言っても信じてもらえないかもしれない、こんなに甘い周平を。

「慣れてけば？」

他人事みたいに軽やかに言って周平は微笑んだ。

「そっいや、朝ご飯食べた？」

話が飛んでほっとする。そっえばコーヒーも買ってない。

「うっん、まだ。周平君は？」

「うん、このラテだけ。ここのサンドイッチでも買ってく？今日の
はアボカドとチキンか、プロシユートとラタトゥユのフォカッチャ
か・・・」

「買ってくって？」

公園にでも行くつもりだろうか？

「・・・真紀んち、行っちゃだめ？」

「！」

何を言い出すのか。この男は！

「昨日、あの店員に邪魔されて、話途中だったよな？」

「ええっ！」

まさかここで蒸し返されるなんて。うまくごまかせたと思ってたのに。周平は真紀の手を取った。

「行こ。せつかく早く来たのに、時間がもったいないよ」

勝手に真紀のトートバックから赤いマグを取り出すと、カウンタ―に行き真紀のラテと本日のサンドイッチ2種類をさっさと買い、会計をすましてしまう。商品を待つ間も真紀を眺めながらにこにこしている。

「ね、本当にうちにくるの？」

正直、これがデートの後なら（そうだ、これはまごう事なきデートなのだ！）考えてない訳じゃなかったけれど。まさか朝の10時前とは！

「困る？」

周平は無邪気に尋ねる。シューツとミルクがスチームに掛けられる音と一緒に、真紀の頬も上気する。

「・・・いいけど」

仕方なく呟くと、周平は満面の笑みでふたり分の朝食を持って歩き始めた。

後日談 1月 ラテの冷めない距離(2)

バーナードカフェの脇に伸びる路地を進んで、公園の角を折れると真紀の部屋のある白い三階立ての建物が見えた。

「近くていいねえ」

子どもたちがベルを鳴らして自転車で通りすぎる。どこから聞こえる掃除機の音。植木に水をやっている近所のおじさん。まごう事なきいつもの日曜。なのに隣にいるのは。真紀は周平の嬉々とした横顔を見つめた。何だか信じられない。本当にうちに来るんだ。促されるように部屋に続く階段を上がると、真紀の部屋にたどりついた。

「ん？」

鍵を開けようとしたところで、ため息をついている真紀に気づき、周平は顔をのぞき込む。

「少し外で待つてた方がいい？」

「・・・そうしてくれると助かる」

ほっとして真紀が鍵を開けると、

「でも5分」

ときつぱり言って腕時計を指す。

「それ以上はだめだよ」

いそいでドアを閉め、そのまま玄関に座り込む。ああ、もう！私の性格を知りながらどうしてこんなにも追い詰めるのか。泣きそうだ。とにかく、落ち着かなければ。そうだ、まずブーツを脱がなきゃ。今日に限ってなんでこんなものをはいたのか。ジッパーを下げてうんうんと引っ張っていると、がちゃっと音がしてドアが開いた。

「えっ！？」

なぜ鍵が？

「時間切れ」

周平が鍵をぶらぶらさせてドアから顔を覗かせた。

「ドアに刺さったままだったけど？」

周平は座り込んでいる真紀のブーツを簡単にすばっすばっと引って脱がすと、両手を引いて立たせた。

「なんでブーツ脱がすの慣れてんの?!」

憤慨しながら真紀が言えば、

「いつもお袋に引って張ってーって言われるんで。何、もしかして妬いてくれる？」

無邪気に喜んでいる。もう、やだ。恥ずかしくて顔が上げられない。壊れた人形のように闇雲に首をふった。周平はそのまま真紀の両手を引って張って自分の腰に回すようにすると、真紀の頬を自分の両手で包む。

「・・・やっど、ふたりきりだ」

甘いキスが降ってきた。額に、頬に、角度を変えて唇に、何度も、何度も。俺はここだよ、と歌うように。最後にぎゅっと抱きしめて、ずっど、こうしたかった。」

と吐息混じりに呟いた。抱きしめたまま部屋の中に移動すると、絨毯の上においたクッションの上に真紀ごと腰を下ろした。後ろから足の間にすっぽりと抱き込まれて身動きがとれない。しかも周平の唇は真紀の耳のそばにあった。

「ねえ」

甘えるような声にぞくつと震えた。

「俺のこと、好き？」

「そんなの、」

わかってるくせに。

「言ってよ」

促すように身体を揺らした。真紀は望まれる幸せに酔いながら、口を開いた。

「・・・好きだよ」

周平はぶるつと震えてから、真紀をきつく抱きしめた。

「いつから？」

「・・・自覚したのは、二人でカフェに行くようになってからだけど、」

自分の気持ちを相手に伝えるのは、なんて照れくさく難しい作業なのか。

「きつと、もつと前からだと思う」

うれしい、という言葉の代わりに後ろからぎゅつと強く抱きしめられた。

「・・・周平君は？私だって好きって言われてないよ？」

周平は肩をつかんで向き直らせた。拗ねた目をしている。

「まだ、わかんない？」

分からない訳じゃないけど。聞きたい。あなたのその唇から、紡ぐ言葉で。

「・・・愛してる。ずっと、真紀だけだ」

その目。どこまでも自分を欲する視線の熱さ。

「真紀・・・真紀、真紀。」

口づけの合間に幾度となく囁かれその度に体温が上がる。身じろいで、傍らにあるサンドイッチの袋に身体が当たり、かさつと音がした。

「あ、朝ご飯」

思わず真紀が言つと、たしなめるように耳元にキスされる。

「マグだからコーヒーは冷めないよ」

吐息混じりに囁く。

「俺に集中して」

するのが怖いから、気をそらしてるのに。さらに周平は追い詰める。

「・・・今日、泊まってもいい？」

真紀の頭の中で激しい爆発音が鳴り響いた。

「何言ってるの！明日会社でしょ！？」

「離したくない。うちまで一緒に着替え取りに行つて」

「・・・自宅でしょ！二人で行つてお母さんになんていうのよ！」

「離れたくない」

肩口でうめく。

「うちの犬見たいって言ってたじゃん」

言うに事欠いて、犬で釣るなんて。何なの、この大きい小学生みたいな生き物は！思わず吹き出した。ちよつと照れくさそうに周平も笑う。

結局、犬のトムは可愛かった。月曜日の朝、休憩室で一緒の朝ご飯を食べているのを美砂に見つけたのは、ちよつと痛かったけれど。

F i n

後日談／1月 ラテの冷めない距離（2）（後書き）

お読みいただきありがとうございました。ここでひとまず完結です。
この後周平サイド、スピノフなどを予定しております。良かったらお立ち寄りくださいませ。

コロンブスと海賊、真紀と周平のヴァレンティン（前書き）

以前短編集に入れたものをこちらに移しました。

コロンブスと海賊／真紀と周平のヴァレンタイン

「出来た！」

真紀の満足気な声が聞こえる。

今日は言わずと知れたバレンタイン。真紀が夕飯をご馳走してくれるというので、今朝母には会社に行く前に断りを入れた。

「今日、ご飯いらないから」

なるべく突っ込まれないように、出掛け間際さらりと伝えたつもりだったのに。

「いやーん。真紀ちゃんとラブラブ？」

余計なことを。親父も黙っているが、明らかにやにやしている。

「お泊まり、お泊まり？」

「やめてくれないかな、その露骨な言い方」

「だって、それによって朝御飯の支度とか、色々お母さんだって大変なのよ？」

いや、それは明らかに詮索だろう。

「ああ、泊まりだよ！朝御飯は要らない！これで満足かよ！」

「周平、照れてるからって、みはるさんにその言い方はないだろう」
思わぬところで、援護射撃が加わる。これはたまらん。

「もう、行くから！」

這々の体でスーツバッグと鞆を抱え家を飛び出した。

真紀の料理は、いつもは結構田舎料理系で、煮物とか炊き込みご飯がうまい。洋食は自信がないからいつも地味な料理しか出来なくて、と謝る姿もまたいじらしくて。ところが今日は一転。クラムチヤウダーと鮭のムニエル、アボカトとトマトのサラダ。パンは最近買ったホーム・ベーカリーで焼いたという。
「すごいな」

「パンを食べてもらいたかったから、頑張りました」

えへへ、と真紀は笑う。芯から冷え込む2月、温かいスープは五臓六腑に染み渡る。鮭もほどよく塩味が効いてるし、サラダのドレッシングも自家製だ。

「うまい！」

「・・・お腹空いてるからでしょ」

真紀は謙遜する。

「ほんとにうまいってば」

彼女の目をじつと見ると、真紀はたちまち赤くなって下を向いた。
「パ、パン。パンも冷めないうちに食べてみて？」

焼きたてのパンはまだ温かく香ばしい。ちよつと茶色のつぶつぶが入っていて、口に入れるとしつとりしたパン生地の中に少しぴりつとした刺激。

「これ、何だ？」

俺はパンの中の茶色い点々を指していった。

「・・・キャラウェイ・シード」

「キャラウェイ？」

「うん。ザワー・クラウトなんかに入ってるスパイスなんだって。こないだ栗山さんからもらって」

「栗山って、あの洋服屋の？」

忘れもしない真紀の誕生日、あの紫のワンピースを勧めてくれた店員。俺たちのキューピッドだ。

「そう、自分のおうちで作ってるんだって。この時期、お得意さんに配ってるらしいの。」

「この時期？」

「そう、バレンタインだからって」

そこが、分らない。パンをかじりながら続きに耳を傾ける。

「キャラウェイ・シードってね、恋のスパイス・・・なんだって」
照れながら、戸惑いながら言葉を紡ぐ。

「恋？」

「昔から恋人をつなぎ止めるスパイスって言われてきたんだって」
「・・・真紀」

周平はパンを皿に置いて、じっと真紀を見入る。

「これ以上何がしたいのさ」

「これ以上？」

真紀はおどおどして俺を見つめ返す。

「つなぎ止めるって何？もうがんじがらめだけど？」

真紀の手を取って、指の一本一本をきゅっと絡ませる。

「そんな、あの」

困り果てた真紀が懇願するように見上げるから、ふっとため息を
ついて気を逃がす。

「・・・なんてな」

半分、本気だけど。

食事を堪能した後、デザートは勿論チョコレートだった。

ラム酒を練り込んだトリュフだという。ビスケットで作る簡単な
レシピだったんだけど、ちょっとアルコールがきつくなっちゃって
という彼女の言うとおり、ラムが濃く香る。口の中は甘く、熱く。

「・・・俺を酔わせる気？」

酒が弱いつて知ってる癖に。確信犯か？

「知らないよ？」

見つめれば彼女の瞳も潤む。

「真紀」

口付けは甘く、熱く。

コロンブスが持ち帰ったカカオ豆と、
香るラム。海賊が好んだ情熱の酒。

溺れてもいい。

俺は迷いなく飛び込む、真紀という海原に。

まだ知らない宝を探して。

F
i
n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4827p/>

ずっと、冬のままで

2011年9月1日03時25分発行